



Endo Mao



Kasama Hiromu



Inomata Rio



写真上 前後町長の挨拶で始まった第24回青年の主張猪苗代大会。発表後、「あの手、この手 の漢字の話」と題して福島県漢字同好会の八重樫一会长による記念講演が実施された

写真下 発表者の正面に陣取り、厳正な審査に取り組む審査員の皆さん

写真左 上から遠藤真桜さん(吾妻小6年)、笠間大夢さん(猪苗代小6年)、猪俣りおさん(翁島小6年)

災害時に大切なのは、何よりも先にまず自分の身を守ることで、つまり自助だ。発表をした子どもたちは、今回の震災時に避難訓練どおりの行動をとっている。教室にいた子どもたちは、机の下に隠れた。玄関近くにいた子どもたちは、広い校庭に避難した。揺れが収まってからは、教室の机の下にいた子どもたちも教師の誘導に従い校庭に避難している。町内の子どもたちにケガがなかったのは、非常時に備え、学校で実施している避難訓練の成果が発揮された結果だと言える。さらに、実際に大震災にあったことにより、災害が起きた時に何をすべきかが明確になった。実際の災害時に、避難訓練で学んだことを100%出せる人はほとんどいない。命を守るた

私 クラスの友達は今、とても、私は一安心すると、また涙が出てきた。涙はそれから全然止まらなかった。色々な人に「大丈夫か?」と心配された。私の他にも涙が止まらない人はたくさんいた。見かねた男の子達のグループが、ティッシュを一枚百円と言いつつ、みんなに配り、周りをなごませてくれた。普段はけんかばかりしている男の子達だが、この時はたのもしく感じた。(翁島小 猪俣りおさん)

自分の命は守った。次は友だちや周囲の人だ。自分の命を守っただけでなく、仲間のために行動を始めた子どもたちもいた。

電気ははげしく横にゆれ、棚にある本が落ちてきそうならいだった。私はこの時、友達や母の顔が浮かんだ。体育館でスポーツをしている人もいたし、外で遊んでいる人もいた。家では、建物がかくずれて母が下じきになつていないかと心配になった。このままみんなと離れ離れになってしまふのではないかと、思うと、涙が出てきた。(猪苗代小 笠間大夢さん)

い つも通り、帰りの会を終えて、いつも通り家に帰れるはずでした。(中略)いきなりグラグラと揺れたとき、ぼくは、学校の玄関にいました。ふだんとちがう長い揺れに、立っていることもできませんでした。友達と校庭に急いで逃げた後も、みんなひとかたまりになって、誰も何も言えないでいるほどでした。(猪苗代小 笠間大夢さん)

Voice あの時、私たちは



友だちを勇気づけた災害時のユーモア 大平 陸人さん(当時翁島小6年)

あの時は小学校の玄関近くにいたので、校庭に避難しました。泣いている下級生たちを何とかなぐさめようと思い、ティッシュを渡しながらかんづきをしました。「みんなが少しでも和んでくれたら」そんな気持ちでした。



緑小学校での避難の様子を語る 金子 瞳 教諭(27)

緑小学校では、3年生以上が授業中でした。生徒たちは机の下に隠れて揺れが収まるのを待ち、校長先生の放送に従って校庭に避難しました。落ち着いて指示に従うことができたので、訓練の成果が出ていたと思います。

特集 子どもたちの 3.11

未曾有の大災害と言われる東日本大震災 あの時、子どもたちはどう感じたのだろうか。そして、あの震災から何を学んだのだろうか。「青少年の主張猪苗代大会」の発表から見た子どもたちの心の動きや行動から、復興に向けたヒントを探る

Chapter 1 その時、子どもたちは How did children face up to the earthquake?

3月11日 午後2時46分 東日本大震災発生

あ の日、私は学校の体育館で卒業式の準備をしていました。終わりに近づき教室に戻ろうとした時、カタカタと何か音がしました。私はだれかのいたずらかと思っていると突然大きなゆれがおそったのです。それはとても長いものでした。避難した後とてもこわくてこわくて、頭の中が真っ白になりました。(吾妻小 遠藤真桜さん)





Osaka Tatsuhiro



Kato Saki



Kobuna Kazutomo



Jin Miyuka



Abe Mizuho



Onoda Yukimi



Suzuki Satoe



Nanba Saeka

## Chapter 2

# 私たちは こう感じた

今まで経験したことのない事態に子どもたちが受けたショックは大きかった。彼らは感じていた。当たり前だと思っていた日常は、本当は当たり前ではなかったことを。そして、胸の中に新しい何かが芽生えていることを。

上段写真右から 大坂龍裕さん(長瀬小6年)、加藤咲希さん(緑小6年)、小鮎一友さん(千里小6年)、神未由華さん(吾妻中3年)、安部みずほさん(東中3年)、小野田幸実さん(猪苗代中3年)、鈴木聡恵さん(猪苗代高2年)、難波彩香さん(猪苗代高2年)

## ぼ

くは今まであたり前のようになしてきたことがあたり前でなくなってしまったことを感じたのです。毎日あたり前のように家族と過ごし、学校に行き友達や先生と会い生活をしてきたことが、今はそれがあたり前でなくなっていました。(中略)買い物に行ってもどんな食べ物か安全かを考えてしまうこともあります。毎年今頃だったらみんなとプールで泳ぐことを思い切り楽しむのに、今年は何だか違って心配しています。(千里小 小鮎一友さん)

大人よりも感受性が強い子どもたちが、この震災によって受けたショックは大きかった。彼らは何かが変わってしまったと感じていた。子どもたちは気付いた。当たり前だと思っていた日常は、本当は当たり前ではなかったことに。そして思った。自分にできることは何だろうと。

## 担

任の金子先生から、先生が以前勤めていた南相馬市の鹿島小学校の話を聞きました。(中略)この話を聞き、何か役に立ちたいと思っていたのは私だけでなく、友達も同じでした。みんなと話していると、

## 避

難先の小学校で見た光景は、テレビで見ていた光景そのものでした。私は、自分に何かできることはないかと考え、毛布配りのボランティアを始めました。(猪苗代中 小野田幸実さん)

## こ

のボランティアの心は、支え合って生きている人間社会の中では、なくてはならないものだと思います。(猪苗代高 鈴木聡恵さん)

子どもたち一人一人が自分のできることを考え、行動した。被災した学校にメッセージ付きの鉛筆を送った。ボランティアに参加した。そうした行動の中から、他人との関わりや人とのつながりなど本当に大切なことを学んだ。

## 人

を傷つけるのも、立ち止まらせるのも人です。そしてまた、人の傷を癒すのも、背中を押してくれるのも、人なのです。つまり、人と人は、つながりあうことで生きているのです。(中略)「人は、支えあって生きている」誰しも一度は耳にしたことがあるでしょう。私はこの大震災で、これは真だと気付かされました。(猪苗代高 難波彩香さん)



スマイルプロジェクトで南相馬市の鹿島小学校に笑顔をプレゼント

緑小学校 6年 加藤 咲希さん

苦しんだり、困ったりしている時に、まず笑顔になれば元気が出る。それが復興にもつながっていくと思い、鹿島小学校にメッセージ付きのスマイル鉛筆を送ることにしました。それがスマイルプロジェクトです。自分たちのしていることが、鹿島小学校の皆さんの笑顔につながっていました。先月、南相馬市に鉛筆を届けました。鹿島小の皆さんの笑顔が見れてうれしかったです。

鹿島小学校のみんなが「明るく元気になってほしい」「笑顔になってほしい」という願いができました。そう、鹿島小学校のみんなが笑顔になる。それが、私の提案した「スマイルプロジェクト」の名前の由来なのです。(緑小 加藤咲希さん)

## 今

、たいへん苦しい思いをしている人たちに、私なりの想いを寄せる気持ちになってきたのです。今までは、地震の被害を新聞やテレビでみても、こんな気持ちにはあまりなかったのに：(吾妻小 遠藤真桜さん)

## 生

きているという事は、一人じゃないということを忘れないで欲しい。そして、愛されているという事も決して忘れないでほしい。私は今という時をたくさんの人と共に生きている事を、とても幸せに思っている。(吾妻中 神未由華さん)

## 私

は今、とても幸せを感じています。勉強のできる環境にいられて、大好きな吹奏楽ができて、新しい学校で大切な大切な友達と出会えて、そして、家族みんなで一緒にいることができるからです。確かにこの震災で環境は大きく変わり、前の学校で叶えられるはずだったハープ演奏の夢は崩れました。何をしていても、「わからない」「どうしよう」の繰り返しでした。しかし、逆に震災がなければ、たくさんの人に支えられているという実感をもつことはなかったと思います。かけがえのない大切な友達に出会うこともなかったでしょう。(猪苗代中 小野田幸実さん)

子どもたちはもう知っている。人が困っているときに助けてあげられるのは人であるということ。人は一人では生きられないということ。

## 家庭、地域と学校の連携が大切

東日本大震災の直後は、家の中が怖くて車の中にいました。すると、今にも泣き出しそうな顔で小さな子どもが1人、家の前を通りました。心配で声をかけると泣き出してしまったので、1時間くらい家で預かりました。その子は避難場所と教えられていた緑小学校を目指していましたが、途中で不安になってしまったようでした。子どもは教えられた通りに行動しましたが、そこに危険が伴う場合もあります。今回の震災のような場合、大人でも危険かもしれません。家族が誰もいないような時に助

け合えるのは、地域の私たちだと思います。我が家は義父が消防署員で、夫は消防団員です。災害時に男手は家にいません。自分たちで行動すること、地域の人と支え合うことが大切です。今回の災害では、早いうちに緑小学校に避難所が開設されたので、本当に助かりました。自分の子どもにも、家に誰もいなかった場合は、学校に避難するようにと教えました。

家庭、地域と学校が連携して、子どもたちの命を守る。大人の命も守る。そんな関係作りが求められていると思います。



六角まゆみさん (金曲)

Rokkaku Mayumi

東日本大震災発生時、1人で行動していた子どもに気付き保護した





子どもたちのこの笑顔こそ猪苗代の希望。この元気こそ猪苗代のエネルギーだ。  
(猪苗代中学校サッカー部、野球部、バドミントン部、スキー部の皆さん)

## Chapter 3

# 彼らとともに つくる未来

The future We're gonna make with youth.

震災のショックから立ち直るためには  
こうすればいいと考えた。  
大切なものが何なのか、それも分かった。  
今こそ、子どもたちに学び  
一緒に協力していくべきだ。

### 新しい未来へ 復興への提言

震災後の今だからこそやらなければいけないことがある。今だからこそ考えられることがある。子どもたちからの未来への提言。

### 屋

根の上に設置する太陽光発電は最近猪苗代でも目にするようになりました。風力発電は、強い西風が吹く会津にはぴったりだし、猪苗代の近くにもたくさん施設があります。

### 地

震さえなければ、みんなが悲しい思いをすることはなかった。でも地震がなかったら、新しい友達には出会えて

大切なものは夢、希望、家族、そして仲間

### い

つしよに悲しむという小さな思いでも、ささやかな節電・募金でも、被災された方に思いを寄せている人が大ぜいいます。こういう時だからこそ、笑顔を大切にしていっしょにがんばっていきましょう。

(吾妻小 遠藤真桜さん)

また、火山の多い日本には地熱発電ができるところがたくさんあると思います。施設を作るためにたくさん費用がかかると思いますが、これからの日本の未来を考えたら、今こそ作っていくべきだと思います。

(長瀬小 大坂龍裕さん)

一人一人が地球環境をとて、も良くするためにがんばれば、エネルギーや資源が限りあるものから限らないものになる日がいつか来ると思っています。また、そんな技術を生かして、失った自然をもとにもどして、地球に恩返しをしたいです。

(猪苗代小 笠間大夢さん)

## Voice



新しい友だちからたくさんのことを学んだ

安部みずほさん(東中3年)

双葉中学校から転校してきた松本さんと菅野さん。吹奏楽をあきらめない二人の強さや明るさに、自分が元気をもらったほじでした。友だちと出会えたことは本当によかったと思いますが、震災のことを考えると複雑な気持ちです。転校してしまうのはさびしいですが、これからも連絡を取り合う大切な友だちです。

なかった。  
この経験でたくさんのことを学びました。どんな困難にも、決して負けない強い心。好きなことに、本気で熱中できる熱い心。大切なことを教えてくれたのは、転校してきた友達みんなです。今、ありがとうと一番に伝えたいです。

(東中 安部みずほさん)

いことは、もう一度、あの奪われた夢や希望を取り戻し、前に進むということだと思えます。

(猪苗代中 小野田幸美さん)

子どもたちは、夢や希望を見つけ出し、前に向かって歩き始めている。きつとそれが生きていく上で大切なことだとわかっていてからだ。復興に向けては大人だけではなく、子どもたちも一緒に協力していくことが大切だ。

NHKの幼児向け教育番組「できるかな」に出演し、ノッポさんとして活躍した高見のつぽさんの有名な話がある。

のつぽさんは、子どもたちに敬意を込めて「小さい人」と呼ぶのつぽさんは、内面の基本的なところは、小さい人(子ども)も大きい人(大人)もたいして変わらないのだと言う。

「小さい人」という言葉は、外見的・物理的なことを言っているだけ。彼らは賢くていろいろなことを考えている。大人と同じなんだとのつぽさんは語る。今回の青年の主張を聞いた後に、そんなことを思い出した。子どもたちの発表に込められていたのは、夢や希望を忘れてはいけない。人が困っているときに、助けてあげられるのも人なんだという、シンプルでスト

### 友

達がいる、学校に行けるという喜び。帰る場所があるということのありがたさ。そして、家族と一緒にいられることが幸いで、その家族はとてとても温かい存在だということ。そう考えると、この震災は、よかったのか悪かったのかかわりません。ですが、守られたこの命で私がやらなければならな

レートなメッセージ。

大人が恥ずかしさや外間を気にして二の足を踏んでしまうようなことを、子どもたちは平気で口にし、行動に移してみせる。むしろ子どもたちのほうが優れているのではないかと思えるほどだ。

子どもたちが大人よりも早く笑顔に戻るのには、学校があるからだ。子どもたちが大人よりも早く元氣を取り戻せるのは友だちがいるからだ。子どもたちの一番の財産、それは仲間。

大人はつらいことや苦しいことを我慢をする。泣きたくても嘘の笑みをうかべる。でも、泣きたいときには泣けばいい。それを受け入れ、支え、励ましてくれる仲間はいらる。一緒に泣ける仲間がいると、立ち直ることも前を向くこともできる。感情を閉じ込めて、我慢をするから前に進めなくなるのだ。

私たちが忘れていたことを、子どもたちが思い出させてくれた。今こそ子どもたちから学ぶべきだ。仲間とともに笑顔で暮らすことが復興への近道だと、彼らの笑顔が教えてくれている。「Smile (スマイル)こそ猪苗代Style (スタイル)」

大人も子どもと一緒に、笑顔で復興への道を歩んでいこう。  
特集 子どもたちの3・11 終



右から松本さん、菅野さん、星さん

磐梯まつり音楽パレードで猪苗代吹奏楽団と共演、見事な演奏を披露

松本玲奈さん、菅野遼歌さん(共に3年)、星輝<sup>きら</sup>さん(2年)

演奏することができてうれしかったし楽しかったですが、転校するので3人が一緒に演奏するのは今回が最後になってしまいました。震災を憎んだ日もありましたが、東中学校の子たちとの出会いがあったことは良かったです。